



図1 古宮一番堤南端の構造〔A：地山（自然堆積層） B：堤体一段目 C：堤体二段目 D：裏込一段目 E：裏込二段目〕

古宮一番堤の調査

古宮一番堤は、山梨県韮崎市龍岡町下條南割に所在する。釜無川右岸に築かれた近代の堤防で、塩川との合流点に近く、旧流路跡や洪水の影響による田畑の段差や地割からも、同地域の治水を担う主要施設であったことがわかる。しかしながら、本堤防と釜無川の間には現行の連続堤防が構築されたことで、此度の圃場整備で廃堤が決まり、2019～2021年度にかけて発掘調査を実施した。

古宮一番堤は全長540m、高さは5.5mを測る。堤体の構造は石葺きの範囲、内部の材質、根固め施設（続中樁？・木工沈床）の有無などから大別4区分することができた。しかし、堤体の構築方法は共通性があり、右写真のa地点の断面〔上写真〕のように、基底部の掘り込みおよび地山〔上写真A〕から中段まで〔同B・D〕、その上から馬踏面まで〔同C・E〕と、二段階に分けて堤防を構築している。また8箇所 of 断ち割り調査から、礫積みと砂利積みの違いはあるものの、いずれの箇所も同様であり、修築・改築または増築も同じ構築方法で行われてきたことが明らかとなった。（望月秀和）

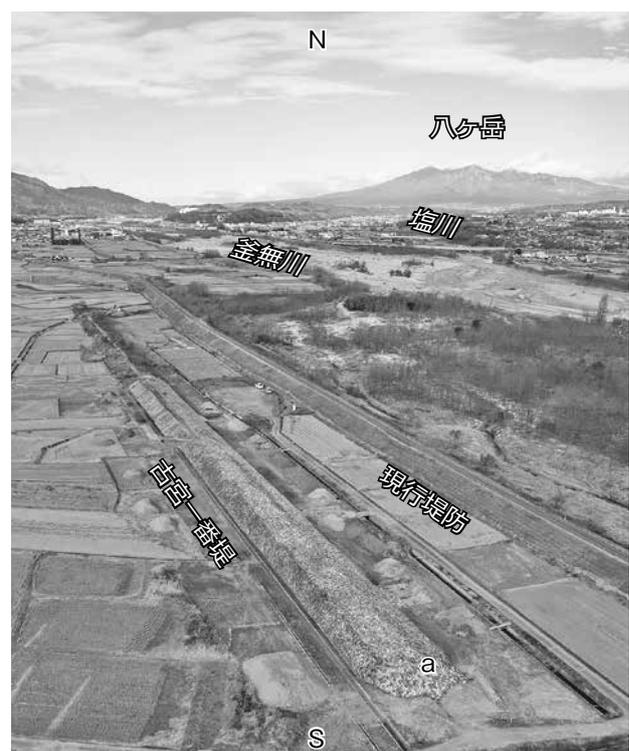


図2 古宮一番堤の景観（2019年調査時）

研 究
ノ ー ト

掘立柱・礎石建物からみた中世村落の構造

—山梨県韮崎市御座田(みさだ)遺跡の調査事例から—

平野 修・室伏 徹

はじめに

今回事例として扱う御座田遺跡は、本誌第59号でも発掘成果の一部を紹介している。山梨県韮崎市龍岡町下條南割地内に所在し、甲府盆地の北西部の釜無川と御勅使川の合流地点に程近い、釜無川右岸の氾濫原と御勅使川の土石流堆積物で覆われた小扇状地上に立地する遺跡であり、地元考古学研究者の間でも、こうした場所には遺跡自体が存在する可能性は低いと考えられている地理的環境をもつ場所である。

本遺跡の発掘調査は、圃場整備事業に伴い2019年10月～2020年6月にかけて行われた。韮崎市教育委員会と当研究所で発掘調査区を分けて実施し、礎石建物、掘立柱建物、竪穴建物の建物遺構の他、塀、土坑、墓坑、溝跡、火葬遺構、炭焼遺構等といった中世～近世にかけての遺構・遺物が確認されている。

本拙稿では、本研究所が調査を担当した第1次調査の圃場地区3地点（圃場第1～第3調査区と呼称）から検出された掘立柱・礎石建物の変遷からみる中世村落構造の変遷について述べてみたい。（平野）

1. 御座田遺跡第1次調査の概要

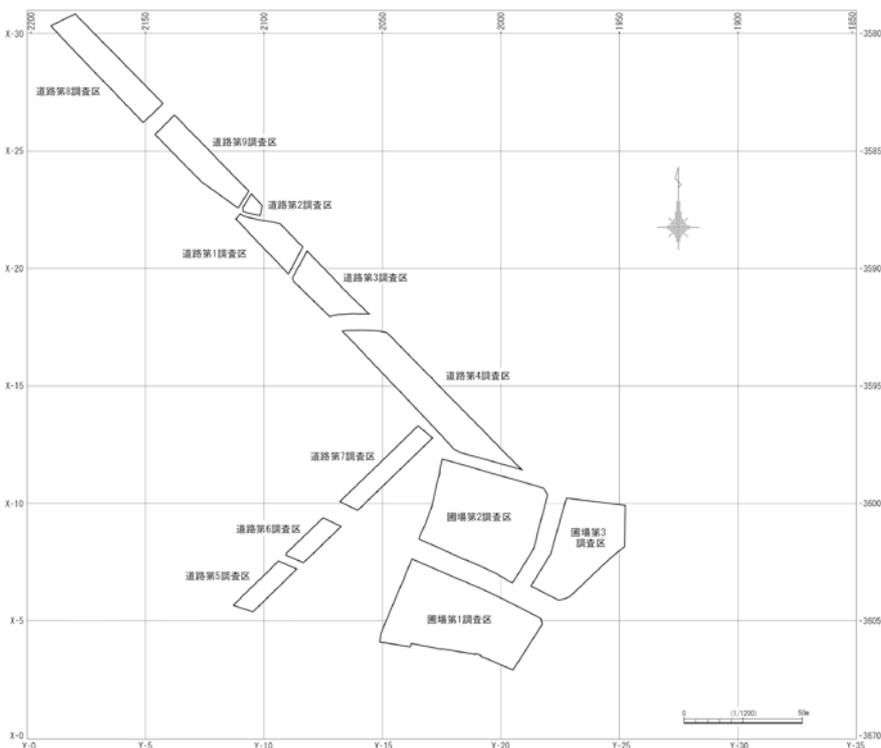
本研究所が担当した圃場第1～第3調査区は、文化

11（1814）年に成立した『甲斐国志』（以下『国志』とする）にみられるように、『国志』成立以前には「御座田村」が存在したものの、度重なる洪水災害のため移転したとされる「御座田村」推定地内の一画にあたる。今回分析対象とした掘立柱・礎石建物は、三つの調査区から確認できたもので計34棟を数える。これら建物遺構は、墓坑や炭焼遺構といった使用目的がわかる土坑や、その他用途不明の土坑とともに重複して検出されているが、礎石・掘立柱建物をはじめとする各遺構からは、構築年代を確定できるような遺物の出土が極めて少なかったことから、調査区内の土地利用の変遷を捉えるのには困難を極めた。

一方、圃場地区と併せて調査された道路新設地区の道路第1～第9調査区では、各調査区の現地表下1.5～2.0mで水田土壌化層と畠土壌化層を確認することができ、その上層でも畦畔を伴う土壌化層を確認することができた。地表下1.5～2.0mで確認された両層位は、上下に連続して確認される箇所と、道路第4調査区の事例のように両層位の間に洪水砂の間層をもつ箇所があり、両層位は時間差を持つことが判明している。

両層位の年代については、生活痕跡を残さない生産域のため土器類の出土遺物が皆無でその年代決定には苦

慮したが、幸い道路第9調査区の水田面から炭化材片が出土したため、それに対する放射性炭素年代測定を行った結果、暦年代範囲で1039-1187 cal AD と 1037-1162 cal AD、つまり平安時代中期～後期という分析結果を得た。その年代については、他の各道路新設調査区の層位的比較検討からも妥当な年代観であると考えている。そして水田区画の方向性は、壁面確認ではあるが畦畔や水路の確認状況からほぼ正方位をとっている状況が推測される。こうした平安時代以来の水田区画の方向性や水路の開鑿状況は、表層にみられる現代の耕地区画にも強く反映している可能性が高いことが判明した。



第1図 令和元年度御座田遺跡調査区位置図

また、道路第6調査区でも、現地表面下約1.4mで、上記水田層より下位の層位である灰色砂層面で、10世紀前葉の玉縁口縁をもつ甲斐型土器坏の完形品を伴う炭焼窯が検出されている。本調査区は、2016・2017年度に韮崎市教育委員会が道路付け替えに伴い発掘調査を実施した発掘箇所北東側に隣接しているが、その調査では6世紀以降の須恵器窯に伴う灰原が確認されている（渋谷2017）。このことから本調査区でも窯や製作工房に関連した遺構や粘土採掘坑等の発見が期待されたが確認することができなかった。

その他、道路調査区の各区では、伊勢湾台風（1959年9月）時と思われる洪水痕跡や、道路第2および第3調査区では噴砂痕跡等がみられ、洪水災害や地震災害に関わる痕跡も数多く確認することができた。ちなみに噴砂痕跡は液化化現象で、震度5弱で起こりうる現象である。道路第2および第3調査区でみられる噴砂痕跡は、現状水田直下の整地層まで及んでいることから、明治以降に発生した地震に伴うものと思われる。（平野）

2. 御座田遺跡の掘立柱建物の類別と年代

御座田遺跡の圃場地区から検出された柱穴の数は多いものの、建物として認識できたものは半数にも満たず、さらなる検討が必要と考えられる。そうした状況下であるが、本節では建物として認識できた掘立柱建物を柱配置構造から以下のように類別してみたい。

【御座田1類】

梁行2間飛ばしで桁行に1間ごとに柱を配置した桁側柱建物。本遺跡では2間四方の小規模建物が多いが、大規模なものでは北杜市深山田遺跡5類建物群が該当する。本県では年代を確定する遺構が見いだされていない。しかし小規模建築は勝沼氏館跡第1期郭外家臣屋敷建物群にみられ、第1期直前の14世紀後葉から15世紀前葉の年代が適当と考えられる。

（御座田1類の建物）

- 1区 SB14、SB09、SB15
- 2区 SB04、SB06、SB07
- 3区 SB01、SB02、SB03

【御座田2類】

梁行2間飛ばしで、かつ桁行も2間飛ばしの桁側柱建物。勝沼氏館跡第1期郭外家臣屋敷建物群が該当し、白磁皿B群（15世紀前葉）を伴うことから、15世紀中葉頃と考えられる。

（御座田2類の建物）

- 1区 SB11、SB12

- 2区 SB03、SB05

【御座田3類】

梁行2間飛ばしで、桁行も2間から3間飛ばしの桁側柱建物。北杜市金生遺跡1号掘立柱建物が大型の事例である。瀬戸大窯製品を伴い始めることから15世紀後葉から16世紀前葉の年代が考えられる。

（御座田3類の建物）

- 2区 SB08、SB09、SB10

【御座田4類】

3類建築の梁行に妻柱が配置された建物。勝沼氏館跡第2B期から3A期郭外家臣屋敷建物群が該当する。瀬戸大窯の鞠印花紋灰釉端反皿を伴う時期の16世紀中葉の年代が考えられる。

（御座田4類の建物）

- 1区 SB19
- 2区 SB01、SB02
- 3区 SB05

【御座田5類】

第4類建築の内部に居室区分柱が現れる建物で、大型建物には廂を伴う場合がみられる。勝沼氏館跡外郭および郭外第3A期の家臣屋敷が16世紀後葉で屋代氏館跡内と郭外家臣屋敷建物群が17世紀前葉の事例となっている。

（御座田5類の建物）

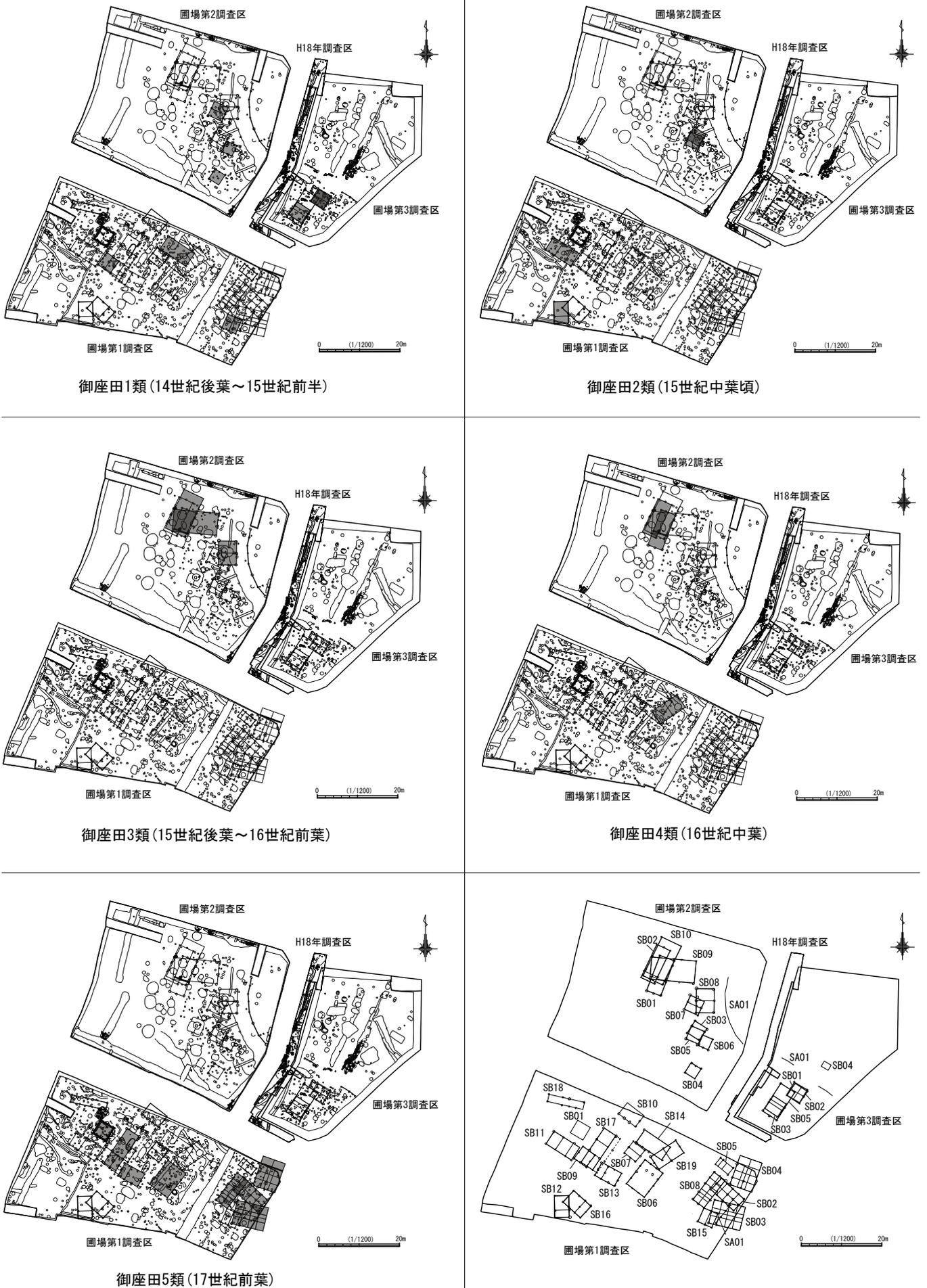
- 1区 SB02、SB03、SB04、SB06、SB08、SB13、SB16、SB17

以上のように、御座田遺跡では類別できなかった建物もあるが、第1類建物は各地区に小規模な建物が分散的にあり、2類は数が少なくなく、3類は2区のみとなり、4類は少数であるが各地区に分散し、5類は1区に集中しているなど、遺跡内における各建物類別のあり方から村落構造変化を読み取ることができそうである。（室伏）

3. 中世掘立柱建物変遷からみた村落構造の変遷

前項では、居住施設と考えられる掘立柱建物の構造の違いが、年代決定の傍証となることが判明した。その分析結果を援用し、本節では今回の調査区における中世村落の展開について概観しておきたい。

今回の調査区は、御勅使川によって形成された小扇状地上に立地しており、地形的にも御勅使川と釜無川の影響により微起伏に富んだ氾濫原であったと推測される。中州状の埋没微高地には居住地、微凹地上には水田や畠といった耕作地が展開し、散村的な村落景観であったと推測される。道路新設調査区の発掘調査成果からも、圃



第2図 御座田遺跡第1次圃場地区掘立柱建物等建物変遷図

場第1～第3調査区の集落の西側には耕作可耕地が展開していたことがわかる。

御座田遺跡圃場地区の集落開始時期は、14世紀後葉から15世紀前葉頃で、圃場第1～第3調査区に小規模建物が散在的に現れる。続く15世紀中葉段階では、掘立柱建物は第1調査区西側と第2調査区に限られ、区画溝を挟んだ第1調査区東側と第3調査区にはみられない。15世紀後葉～16世紀前葉段階では、掘立柱建物は第2調査区だけにみられ、比較的大規模な掘立柱建物が同じ場所で建替を行っている。第2調査区南側と第1調査区および第3調査区で建物はみられない。

16世紀中葉段階では、引き続き第2調査区と同じ場所で建て直された建物がみられ、第1調査区北西部側でも再び建物が建てられる。そして集落の終焉段階である17世紀前葉では、建物は第1調査区に集約され、第2・第3調査区に建物はみられない。第1調査区のSD01を挟んだ西側エリアでは、大型建物群とともにSB01とした地覆石付礎石建物で土壁ないし板壁の倉庫的建物があり、一方のSD01東側エリアでは廂付大型建物が集中し、建替が繰り返されているという状況が看取でき、建物の大型化と構造変化とともに、村落集団の成長も看取することができよう。

そうした中で全時期を通じて住宅建築の掘立柱建物がみられないエリアがある。それは第2調査区と第3調査区にまたがって弧状に展開するSA01とした堀跡の北東側および北側エリアである。特に第3調査区エリア内では、ウマの歯が出土したSK23、人骨一体分が出土したSK25、火葬坑のSK26等が検出されており、さらにSB04とした前身が掘立柱構造で、後に礎石化する1間×1間構造をとる二脚門構造の礎石建物が存在しているのである。おそらく当該建物は、鳥居ないし冠木門であったと思われるが、鳥居であれば信仰的空間の区切りとなり、冠木門であれば集落空間を区画する施設の出入り口となろう。そして各時期ともに建物がみられない他のエリアでは、農耕や鍛冶等をはじめとする生業作業エリア等、様々な活動エリアになっていたと思われる。

(平野・室伏)

おわりに

遺跡不毛の地と考えられてきた釜無川の氾濫原で、今回の調査では先述したような古代から中世・近世にわたる遺構・遺物が発見され、この地には遺跡は存在しない

という地元考古学研究者がもっていた先入観を払拭させた調査であった。さらに『国志』に記された氾濫原における「御座田村」の存在を裏付け、廃村となるまでの村人たちの生活痕跡を重層的に捉えることができる貴重な発掘調査事例である。今後の調査研究や地域史研究において発掘された本遺跡の資料群が有効に活用されることを願っている。

また、御座田遺跡内には前述したように6世紀代から9世紀代まで続くと思われる須恵器窯の存在があり、さらに遺跡周辺には古代から中世まで続く八田牧等があることから、当該地域は古代から物流の拠点および水陸交通の要衝であったと思われるとともに、中世以降もそうした古代の先進技術集団の末裔達が御座田遺跡の地に村を構えた可能性もあろう。「御座田村」が成立した契機については今後の課題である。

(平野)

〔付記〕本拙稿は、2021年3月に葦崎市教育委員会他から刊行された『御座田遺跡—県営経営体育成基盤整備事業 龍岡地区圃場整備（第1工区圃場・道路新設地点）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』第10章総括において、平野と日本考古学協会の室伏徹氏とで共同執筆した内容を一部改稿したものである。室伏氏には発掘調査の段階から現場に足を運んでいただいたうえ、さらに整理段階では掘立柱建物の分析を進めていただき、種々のご教示・ご協力を得た。ここに、改めて厚く御礼を申し上げたい。

【参考文献】

- 明野村教育委員会他 2000『深山田遺跡』明野村文化財調査報告12
- 甲州市教育委員会 2009『史跡勝沼氏館跡—外郭発掘調査報告書（中世編）—』甲州市文化財調査報告書第3集
- 甲州市教育委員会 2010『史跡勝沼氏館跡—内郭発掘調査報告書（中世編）—』甲州市文化財調査報告書第5集
- 渋谷賢太郎 2017「御座田遺跡（葦崎市）」『山梨考古』第146号 山梨県考古学協会
- 山梨県教育委員会 1988『金生遺跡 I（中世編）県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第39集

研 究
ノート

シルクロードと果物利用小史

赤 司 千 恵

帝京大学文化財研究所では2016年から、中央アジア、キルギス共和国のアク・ベシム遺跡の発掘調査を行っている。アク・ベシムは中世のシルクロード沿いの中世の遺跡で、5世紀にソグド人によって建てられ、7世紀には唐の外城が置かれるなど、さまざまな民族が共生していた。当時のシルクロードを通じた東西文化交流は広く関心を集めてきたが、その交易路沿いの実際の生活はまだ知られていない。そんな中で、アク・ベシムで出土する土器や骨、植物種実などは、中世交易都市の生活文化を物語る重要な資料である。

2019年の調査では、第2シャフリスタン中央部（AKB-15区、10～11世紀）から見つかった深いピットの底部から、大量の果物の種子が出土した。ブドウ5,253点、リンゴ157点、ナシ17点、ザクロ7点、メロン204点、スイカ3点、その他が28点である。水漬け状態にあったため腐らずに、地中に良好な状態で保存されていた。同じ発掘区から出土した穀類は、コムギ・オオムギ合わせてわ

ずか48点にとどまっており、果物の種子の廃棄量がいかに多かったかが分かる（中山・赤司2020）。

アク・ベシムの人々は、これらの果物をどのように食べていたのだろうか。日本人にとって果物は、デザートや菓子、酒の材料など、嗜好品というイメージが強いかもれない。しかし果物は、水分補給、保存食、また調味料など、多種多様な用途に使われてきた。本稿では、中世シルクロードの食文化における、デザートとして以外の果物の位置づけについて考えてみたい。

生で食べる

最近の日本の果物はとても甘くておいしいので、そのまま食べるのが一番という人も多いだろう。現在の中央アジアや西アジアの市場でも、ブドウ、サクランボ、モモ、ナシ、スイカ、メロン、カキ、オレンジ、バナナなど、季節ごとに色とりどりの新鮮な果物が並ぶ（図1、2）。夏は道路沿いにスイカやメロンを売る露店をよく見かけ



図1 シリアの果物屋
未熟アーモンド、ピワ、ナツメヤシなどが並ぶ。



図2 シリアのさまざまな果物

左上：ミートボールのザクロソース煮、右上：市場で売られるサンザシの実、左下：塩漬け用のブドウの葉
右下：「 коктейル」と呼ばれるカットフルーツ入りのミックスジュース。

る。中央アジアの夏は暑く乾燥しているので、アク・ベシムの人々も、水分補給を兼ねて果物を生食することは多かったに違いない。

これら果物の固い種子はゴミとして捨てられ、偶然炭化したり水漬けになったりしたものが、土中で保存されて遺跡から出土することになる。ブドウやザクロ、スイカは種子ごと食べてしまう人もいて、糞石に含まれた種子も、石化して出土する可能性がある。

ドライフルーツとして

その他の食べ方として、干しブドウや干しアンズなどのドライフルーツが考えられる。栄養があり保存がきき、持ち運びも容易なドライフルーツは、保存食としても携行食品としても有用な食品だったと推測される。ドライフルーツならば、まるごと炭化して出土する可能性もある。実験によると、生の果実が炭化すると果皮が破れて果汁が漏れるが、干しブドウを炭化させると果皮は破れず、風船のように全体が丸く膨らむことが多いとされる (Margaritis and Jones 2006)。アク・ベシムで出土したのは種子のみだが、シリアやヨルダンの遺跡からは、このような干しブドウだったと思われる炭化ブドウ果実の出土例がある (Akashi 2014; Cartwright 2003)。

また、イブン・ワフシーヤの『ナバテア人の農書』(10世紀)によると、干しブドウは代替食品でもあり、干しブドウをローストして粉にしたものを、パン生地に混ぜるという (Hämeen-Anttila 2006:337)。

種子を食べる

スイカやメロンなど、ウリ科の果菜類は、タネの種皮を剥くと、内部の子葉が現れる。この子葉は脂肪とたんぱく質が豊富で、現代の中東や中央アジアではスナックとして食用とし、タネ食用の品種も存在する。出土植物からスイカ種子を食べていたことが判明した例がある。紅海沿岸の都市クセル・アル＝カディーム遺跡のイスラム時代の層から出土したスイカ種皮と、現代のエジプト人らがタネ内部の子葉を食べたあとに捨てた種皮を比較したところ、割れ方のパターンが一致したという。この遺跡ではローマ時代の層も発掘されており、この時期はまだタネ食していないが、マムルーク朝時代にはタネを食べる習慣があったことが分かった (Cox and van der Veen 2008)。

アク・ベシム出土のスイカやメロンは、割れた種皮の割合は低いので、柔らかい果肉のほうを食べていたと思われる。しかし、ウリ科種子のタネ食文化の広がりとは、

タネ食専用品種の成立に、シルクロードがどんな役割を果たしたのか考えるのは興味深い。



図3 ザクロのソース
魚料理によく合う。(アゼルバイジャン)

料理に使う

中世アラビア語の料理書を見てみると、果物は肉や魚料理にもよく使われていた。特に当時の中・上流階級の食卓では、果汁や果実酢でヒツジや鳥肉を煮込んだ、甘酸っぱいシチューがよく食べられていたようである(尾崎 2012)。酢は庶民の間でも代表的な調味料で、農民はパンに酢をかけたものを日常食としていたという(尾崎 2003:111)。

例えば10世紀のワッラークの『料理書』(Nasrallah 2010)には、ブドウを使ったソースや煮込み料理は25種類、ザクロを使う料理は16点が掲載されている(デザートや飲料を除く)。シトロン、マルメロ、リンゴ、アブリコットなどもしばしば登場している。このように、肉やスパイスとともに多種の果物をふんだんに使用することが、当時、料理を豪華にする方法だったと考えられている(尾崎 2003)。アク・ベシム遺跡からは、ヒツジ/ヤギ、ウシ、ウマの骨が出土しており、肉として消費されたと考えられている(植月・新井 2020)。これらの肉の調理にも、ひょっとしたら果物や果実酢が使われていたかもしれないが、この点を明らかにするには、土器残留脂質の分析などの手法が必要である。

また、前述のワッラークの『料理書』で各所に登場す



図4 アゼルバイジャンのコーネリアンチェリーを使った料理
左上：生のコーネリアンチェリー、右上：ピラフ、左下：肉団子、右下：羊肉の煮込み。

る調味料に、「未熟なブドウの果汁」がある。まだ熟していないブドウの実を使うのは、酸味が求められたこの時代の好みを表すだけでなく、もったいない精神もあったかもしれない。現代のブドウ栽培では、栄養が全体に行きわたるように、実が膨らんでくる前に多すぎる房を間引いて（摘房）、新梢当たりの房数を調整する必要がある（山梨県農業共済組合 HP）。このような間引きの工程が、中世アラブ世界のブドウ栽培でも行われていたとすると、間引いたブドウも調味料として使うことで、無駄なく消費していたと考えることもできる。

ワッラークの『料理書』より、ザクロのシチュー“ルンマーニーヤ”（Nasrallah 2010:279-280）

1. 鶏 1 羽と若鶏 2 羽を切り分ける。
2. タマネギのみじん切り、水 2 分の 1 カップ、オリーブオイルを加えて煮立てる。
3. ザクロ 3 個分の果汁を加えて煮る（2 個分は酸っぱいザクロを使い、3 個目のザクロは、甘くても酸っぱくてもよい）。
4. ムッリー（発酵調味料）少々、黒コショウ、コリアンダーのタネ、キャラウェイ、クローブを加え、肉に火が通ったら盛り付ける。

お酒

アク・ベシムにはキリスト教会址が見つかっており、ワイン工場があったと文献に記されていて、果物の一部は醸造用だったと考えられる。ギリシャの遺跡で、火災にあったワイン工場跡から、圧搾したブドウ果皮の堆積が出土した例もあり（Margaritis and Jones 2006）、アク・ベシムでも今後の発掘調査によって、当時のワイン生産技術が詳しく分かるかもしれない。因みに前述のアラビア語の料理書には、ワインのつくり方も載っている。酒はイスラーム教で禁じられているが、酒の薬効は当時も知られていたようである。ただ、二日酔いの対処法も書かれているので、薬以上の量を飲む人はいたようである（Nasrallah 2010:451）。

このように、食文化において果物は、必須と言ってもよいほどの役割を果たしてきた。新大陸から伝わったトマトが普及してからは、中東の料理はトマト味一色になるのだが、それでも中世から続く多様な果物利用は、現在の中東の食文化にも受け継がれている（図 2～4）。例えば、肉をマルメロとザクロ果汁で煮込む“サファルジャリーエ”という料理は、中世のレシピによく似てい

るし、ケバブのサクランボソースはシリア北西部の郷土料理である（図 2 左上）。アゼルバイジャンではコーネリアンチェリーを、肉団子に入れたりピラフに添えたりする（図 4）。

現代日本では果物を、生食か甘味として食べるのが一般的である。しかし日本にも梅干という、保存食にも調味料にもなる食べ方がある。中世のアジア諸都市の果物利用がいかにも多様だったかを考えると、シルクロード東端部にある日本にも、もっといろんな食べ方があってもいいのかもしれない。過去の食文化史を紐解くことは、昨今の果物消費量の低迷やフードロス、規格外作物の問題の活路にもつながっていく可能性もある。

（帝京大学文化財研究所）

【引用文献】

- 植月学・新井才二 2020 キルギス共和国アク・ベシム遺跡における動物資源利用. 『帝京大学文化財研究所研究報告』 19:35-60.
- 尾崎貴久子 2003 イスラーム初期の預言者ムハンマドとベドウィンの食事：10世紀アッバース朝宮廷社会はこれをどのようにみなしたか. 『生活学論叢』 8号: 104-113.
- 尾崎貴久子 2012 イスラームの食と医. 『東洋学術研究』 51巻:63-91.
- 中山誠二・赤司千恵 2020 アク・ベシム遺跡出土の植物遺存体分析(2). 『帝京大学文化財研究所研究報告』 19: 17-34.
- 山梨県農業共済組合 2021 ブドウの栽培管理. <https://www.nosai-yamanashi.or.jp/agricultural/grape> (2021年7月15日アクセス)
- Akashi, C. 2014 Preliminary results of archaeobotanical studies at the Bronze-Iron Age site of Tell Ali al-Hajj (Tell Rumeirah), Syria. *Bulletin of Ancient Orient Museum* 34: 1-17.
- Cartwright, C. R. 2003 Grapes or raisins? An Early Bronze Age larder under the microscope. *Antiquity* 77: 345-348.
- Cox, A. and van der Veen, M. 2008 Changing foodways: Watermelon (*Citrullus laevis*) consumption in Roman and Islamic Quseir al-Qadim, Egypt. *Vegetation History and Archaeobotany* 17: S181-S189.
- Hämeen-Anttila, J. 2006 *The Last Pagans of Iraq : Ibn Wahshiyya and His Nabatean Agriculture*. Leiden, Brill.
- Margaritis, E. and Jones, M. 2006 Beyond cereals: Crop processing and *Vitis vinifera* L. Ethnography, experiment and charred grape remains from Hellenistic Greece. *Journal of Archaeological Science* 33: 784-805.
- Nasrallah, N. 2010 *Annals of the Caliphs' Kitchens: Ibn Sayyar al-Warraq's Tenth-Century Baghdadi Cookbook*. Brill.

研 究
ノ ー ト

大菱牛と大川倉の仕様について

畑 大 介

はじめに

近世の河川工事で造られた牛類のなかには、19世紀になってから登場するものがあり、甲州の富士川水系では、大菱牛と大川倉がそれにあたる。この二種類の牛類については、眞田秀吉氏が概要についてふれているもの(眞田 1932)、仕様の詳細に踏み込んだ検討はされていない。本稿では両牛類の仕様を把握して、変化や開発の意図などについて考えてみたい。

1. 大菱牛

大菱牛は1840年代以降、笛吹川本流で用いられ、1860年代になると富士川本流等でもみられるようになる(畑 2005)。大菱牛の形態を図化したものは知られていないため、明治14年に内務省土木局が編纂した設計マニュアル『土木工要録』(千賀 1992)(以下、『工要録』と略す)に載る中菱牛を図1に示す。眞田氏は棚が一段で合掌木の長さが2間のものを菱牛、棚が二段で合掌木の長さが3間のものを大菱牛、2間半のものを中菱牛としている(眞田 1932)。

表1に東油川村(笛吹市)の笛吹川通の仕様を示す。弘化2年(1845)から安政5年(1858)までの仕様を確認できるが、これらはいずれも部分的に内容が異なり、同一の仕様はみられない。まず木材の有無をみると、1854年(iv)のみ筋違木が用いられていない。表2 i に東南胡村(南アルプス市)の万延元年(1860)の富士川通、ii に七蔵新田・池田村(静岡県磐田市)の文久元年(1861)の天竜川通、さらにiii に土木寮蔵の明治4年(1871)の『堤防橋梁積方大概』⁽¹⁾(以下、『積方大概』と略す)の仕様を示す。『積方大概』の仕様は、『工要録』と同一である。表2の1860年以降の仕様には筋違木はみられないので、流れとしては使用されなくなっていくのであろう。表1にもどって筋違木の長さをみると、1847年(ii)と1853年(iii)を境として3間1尺(1丈9尺)から3間2尺に変更されている。このほか流れとしてとらえられるのは、下棚梁木の末口(直径)が3寸(i~iii)から3寸5分(iv)、4寸(v)と段階的に太くなっている点、上棚桁木の長さが2間半(i・ii)から2間(iii~v)になり、上棚梁木の長さが2間半(i)から2間(ii~v)になった点、表には示していないが1845年

(i)から1847年(ii)の間に蛇籠が元付としても用いられるようになった点である。これらのほか一時的な変化としては、iiiのみ下棚の蛇籠が6本で上棚が5本であることなどが挙げられる。全体をとおしてみると、ivは上棚梁木末口・下棚敷木本数・枋結竹本数が他の仕様と異なる一方、その前後のiii・vは前述の筋違木の長さや枋結竹の本数などが同じであり、vはiiiの仕様のより戻しとみることができよう。表2でその後の他地域の仕様をみると、先にふれた筋違木の省略に加えて、表1 ivの下棚梁木と上棚梁木の末口、下棚敷木本数、枋結竹本数は表2の仕様と多く共通しており、表1 ivの仕様が最終的に広域において継承されていったようにみえる。東南胡村(表2 i)の仕様は、合掌木と砂払木の長さが2間半であること、七蔵新田・池田村(同ii)は上段の桁木と梁木が長さ2間半と長い一方、下棚敷木の長さが1丈1尺と短いことが特徴であるが、これらが地域性によるものか、時期的なものかは、これだけの情報では判断できない。

2. 大川倉

大川倉は、1860年代になると釜無川本支流、笛吹川・荒川本流、富士川支流などで広く用いられた(畑 2005)。把握できた仕様を表3に示す。iは嘉永3年(1850)の「甲州川々川除道具建一ト組当内訳帳」⁽²⁾(以下、「嘉永内訳帳」と略す)に国中の大菱牛の仕様として示されたもので、大菱牛は大川倉と同じとする。iiは大菱牛のところで示した東南胡村出来形帳の大川倉の仕様で

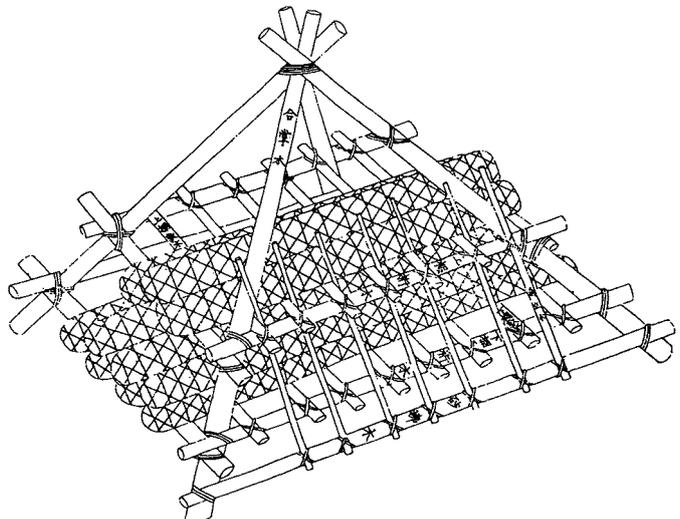


図1 『土木工要録』の中菱牛(千賀 1992)

表1 東油川村（笛吹市）笛吹川通の大菱牛の仕様一覧

部 材 等	項 目	i 出来形帳 (1845)	ii 出来形帳 (1847)	iii 出来形帳 (1853)	iv 出来形帳 (1854)	v 出来形帳 (1858)
合 掌 木 (雑木)	本数	4本	4本	4本	4本	4本
	長	3間	3間	3間	3間	3間
	末口	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸
下 棚 桁 木 (同)	本数	4本	4本	4本	4本	4本
	長	2間半	2間半	2間半	2間半	2間半
	末口	3寸5分	3寸5分	3寸5分	3寸5分	3寸5分
下 棚 梁 木 (同)	本数	2本	2本	2本	2本	2本
	長	2間半	2間半	2間半	2間半	2間半
	末口	3寸	3寸	3寸	3寸5分	4寸
上 棚 桁 木 (同)	本数	4本	4本	4本	4本	4本
	長	2間半	2間半	2間	2間	2間
	末口	3寸5分	3寸5分	3寸5分	3寸5分	3寸5分
上 棚 梁 木 (同)	本数	1本	1本	1本	1本	1本
	長	2間半	2間	2間	2間	2間
	末口	3寸	3寸	3寸	3寸5分	3寸
砂 払 木 (同)	本数	1本	1本	1本	1本	1本
	長	3間	3間	3間	3間	3間
	末口	3寸	3寸	3寸	3寸	3寸
下 棚 敷 木 (同)	本数	10本	10本	10本	12本	10本
	長	1丈3尺	1丈3尺	1丈3尺	1丈3尺	1丈3尺
	末口	2寸5分	2寸5分	2寸5分	2寸5分	2寸5分
上 棚 敷 木 (同)	本数	10本	10本	10本	10本	10本
	長	1丈	1丈	1丈	1丈	1丈
	末口	2寸5分	2寸5分	2寸5分	2寸5分	2寸5分
筋 違 木 (同)	本数	2本	2本	2本		2本
	長	3間1尺	1丈9尺	3間2尺		3間2尺
	末口	3寸	3寸	3寸		3寸
前 立 木 (同)	本数	7本	7本	7本	7本	7本
	長	9尺	9尺	9尺	9尺	9尺
	末口	2寸	2寸	2寸	2寸	2寸
粉 結 竹 (唐竹)	本数	9本	9本	12本	8本	12本
	目通	5寸廻	5寸廻	5寸廻	5寸廻	5寸廻
人 足		10人	10人	12人	10人	12人
蛇 籠	下 棚	9尺籠 7本	9尺籠 7本	9尺籠 6本	9尺籠 7本	9尺籠 7本
	上 棚	2間籠 3本	2間籠 3本	2間籠 5本	2間籠 3本	2間籠 3本
出 典		註7	註8	註9	註10	註11

あり、iiiは明治5年（1872）の最勝寺村（富士川町）の仕様である。梁木の本数をみると2本(i)から3本(ii・iii)に変わっており、甲州では1850年から1860年の間に本数が増やされた模様である。iiiはi・iiと比べると、桁木の長さと同立木の末口の寸法が異なっている。ivは松岡村（富士市）富士川通の安政5年（1858）の出来形帳である。i～iiiの木材と比べると棚敷木が13本と多いほか、多くの木材の長さが異なっている。vに『積方大概』（『工要録』も同じ）の仕様を示す。棚敷木（vは敷成木と呼ぶ）は12本であるが、それ以外の木材の数・寸法はivと同一であり、『積方大概』は駿河の仕様を多く引いたものといえる。

3. 展開と位置づけについて

大菱牛と大川倉が、いつから造られたかについては正

表2 大菱牛の仕様一覧

部 材 等	項 目	i 東南胡村出来形帳 (富士川通・1860) 南アルプス市	ii 七蔵新田・池田村天竜川通出来形帳 (1861) 磐田市	iii 積方大概 (1871) ・工要録 (1881)
合 掌 木 (雑木)	本数	4本	4本	4本
	長	2間半	3間	3間
	末口	3寸5分	3寸5分	3寸5分
下 棚 桁 木 (同)	本数	4本	4本	4本
	長	2間半	2間半	2間半
	末口	3寸5分	3寸5分	3寸5分
下 棚 梁 木 (同)	本数	2本	2本	2本
	長	2間半	2間半	2間半
	末口	3寸5分	3寸5分	3寸5分
上 棚 桁 木 (同)	本数	4本	4本	4本
	長	2間	2間半	2間
	末口	3寸5分	3寸5分	3寸5分
上 棚 梁 木 (同)	本数	1本	1本	1本
	長	2間	2間半	2間
	末口	3寸5分	3寸5分	3寸5分
砂 払 木 (同)	本数	1本	1本	1本
	長	2間半	3間	3間
	末口	3寸	3寸	3寸
下 棚 敷 木 (同)	本数	10本	12本	12本
	長	1丈3尺	1丈1尺	1丈3尺
	末口	2寸5分	2寸5分	2寸5分
上 棚 敷 木 (同)	本数	10本	10本	10本
	長	1丈	1 [尺]	1丈
	末口	2寸5分	2寸5分	2寸5分
前 立 木 (同)	本数	7本	7本	7本
	長	9尺	9尺	9尺
	末口	2寸	2寸	2寸
粉 結 竹 (唐竹)	本数	8本	8本	8本
	目通	5寸廻	5寸廻	5寸廻
人 足		10人	10人	10人
蛇 籠	下 棚	9尺籠 7本	9尺籠 7本	9尺籠 7本
	上 棚	2間籠 5本	2間籠 3本	2間籠 5か3本
出 典		註12	註13	註1・千賀1992

[] : 誤り

確には把握できない。幕府の治水政策は享保期に始まった改革によって見直され（大谷 1996）、新しく成立してきた治水の体制に伴って設計基準書にあたる川除普請定法書が作成されたが（知野 1997）、このなかには両牛類は登場しない。また、地方役人の心得書として知られる寛政6年（1794）跋の『地方凡例録』（大石 1989）（以下、『凡例録』と略す）にもみられない。文政13年（1830）の「甲州川々川除道具建組当内訳帳」⁽³⁾にも登場せず、「嘉永内訳帳」には大菱牛として大川倉の仕様が載る一方、大菱牛は具体的な仕様が示されないかたちで掲載されている。内訳帳からみると大菱牛（大川倉）と大菱牛は、甲州では1830年から1850年の間で使用が認められるようになったとみられる。⁽⁴⁾

菱牛は甲州では1750年代から造られてきた(畑 2005)。菱牛(畑 2019)と大菱牛の仕様を比較すると、構造上の大きな改良点は棚の上下二段化であり、大型化に伴って部材によっては本数の追加や寸法の増加が認められる。

一方、大川倉が造られる前提となる川倉については不明な点が多い。真田秀吉氏は、川倉は聖牛と牛柵の中間に位置する構造としつつ、それらと混称されたり、牛類の汎称とされてきたとする(真田 1932)。川倉は、美濃地方の代官所勤務の経験がある平岡道敬によって元禄2

年(1689)に記されたとされる『地方竹馬集』⁽⁵⁾にみえ(図2)、棚をつけて土俵か石を置くとしている。参考までに『工要録』の川倉を図3に示す。甲州において「川くら」は、明暦4年(1658)に上野村(市川三郷町)が奉行所に提出した訴状にみえるが(安達 1978)、内訳帳や出来形帳等の川除普請関係史料には登場しない。少なくともそれらの史料が多く作成されるようになる18世紀後半以降の近世において川倉は実際には造られていなかったと考えられる。よって甲州における川倉と大川倉の比較はできないが、「嘉永内訳帳」は大川倉と大笈牛は同じとしているので、笈牛と大川倉を比べてみたい。笈牛は合掌木3本で三角錐形を造るかたちが基本形であるが、幕末になると棟木1本に対して合掌木・跡合掌木をそれぞれ2本ずつ用いる形態が生まれる(畑 2020)。この改良型と大川倉は比較的近い骨格構成であるが、部材の寸法は大川倉の方が大きく、棚敷木の本数も多い。棟木と合掌木をもち三角錐形を呈する牛類の中で比較すると、大川倉は改良型笈牛と中聖牛の中間に位置する規模であり、大川倉は中聖牛の小型版と

表3 大川倉の仕様一覧

部材等	項目	i 嘉永内訳帳(国中・大笈牛)(1850)	ii 東南胡村出来形帳(益無川通・1860)南アルプス市	iii 最勝寺村書上帳(1872)富士川町	iv 松岡村富士川通出来形帳(1858)富士市	v 積方大概(1871)・工要録(1881)
棟木(雑木)	本数	1本	1本	1本	1本	1本
	長	3間半	3間半	3間半	3間	3間
	末口	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸
桁木(同)	本数	2本	2本	2本	2本	2本
	長	3間	3間	3間半	3間	3間
	末口	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸
前合掌木(同)	本数	2本	2本	2本	2本	2本
	長	2間	2間	2間	2間半	2間半
	末口	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸
梁木(同)	本数	2本	3本	3本	2本	2本
	長	2間	2間	2間	2間半	2間半
	末口	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸
砂払木(同)	本数	1本	1本	1本	1本	1本
	長	2間	2間	2間	2間半	2間半
	末口	3寸	3寸	3寸	3寸	3寸
跡合掌木(同)	本数	2本	2本	2本	2本	2本
	長	9尺	9尺	9尺	1丈	1丈
	末口	3寸	3寸	3寸	3寸	3寸
棚敷木(同)	本数	10本	10本	10本	13本	12本
	長	1丈	1丈	1丈	9尺	9尺
	末口	2寸5分	2寸5分	2寸5分	3寸	3寸
前立木(同)	本数	1本	1本	1本	1本	1本
	長	1丈	1丈	1丈	2間	2間
	末口	2寸5分	2寸5分	3寸	2寸5分	2寸5分
棟挟竹(唐竹)	本数	2本	2本			2本
	目通	6寸廻	6寸廻			6寸廻
粉結竹(同)	本数	10本	10本		10本	10本
	目通	5寸廻	5寸廻		5・6寸	5寸廻
大工		1分	1分			
人足		5人	7人		6人	6人
蛇籠	重り籠		2間籠 5本			2間籠 5本
	尻押		9尺籠 2本			9尺籠 2本
出典		註2	註12	註14	註15	註1・千賀1992

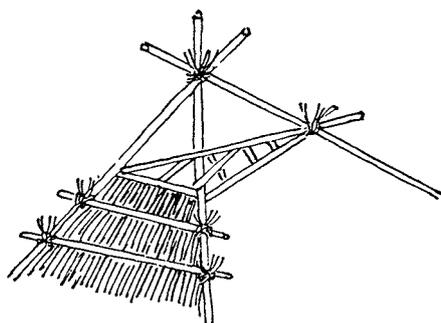


図2 『地方竹馬集』の川倉(註5)

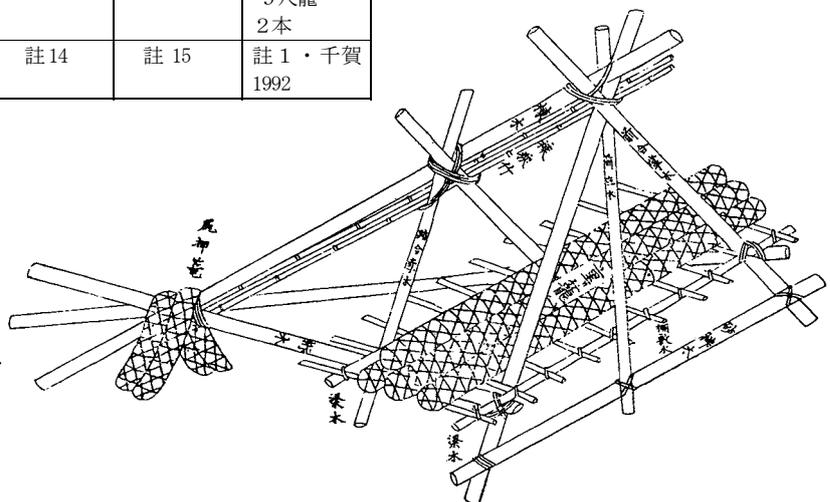


図3 『土木工要録』の川倉(千賀1992)

して開発されたと考えられる。骨格は異なるが、改良前の笈牛も規模的には大川倉より小さい。ただし、笈牛の類は聖牛や川倉の類にみられる前合掌木と棟木の交点に達する1本の長い前立木はもたず、短めの前立木を5本備えている。規模的には笈牛の類は大川倉より小さいが、前立木の用法の差は河川の個性に対応する使用特性が関係していると考えられ、単に骨格の規模の面だけでは語れない要素を含む。

七蔵新田・池田村の大菱牛の仕様(表2 ii)は、木材の寸法が一部異なるものの、甲州(表1 iv)と比較的多くの数値が一致しており、大菱牛の仕様はある程度広域的であったことを示唆する。仕様の詳細は把握できないが、大菱牛は安政4年(1857)に論瀬村・清瀬村(新潟県五泉市)の阿賀野川通でも40組造られている(建設省1988)。一方、今回取り上げた大川倉の仕様(表3)において甲斐と駿河を比較すると、木材の本数の差は棚敷木のみであるものの、長さは多く異なっており、同じ富士川水系でも同時期において地域差が認められる。

東油川村の大菱牛の仕様をまとめた表1では、1840~50年代に木材・竹材の本数や寸法において変更が繰り返えされたことが確認された。この仕様の変動は、改良のため模索が続けられたことを示しているのであろうか。これに近い状況は、18世紀後半の尺木牛でも認められる⁽⁶⁾。

おわりに

近世において大菱牛と大川倉が造られた期間は短いですが、ともに仕様は変化していることが確認でき、大川倉については地域性も看取された。大川倉は前述のとおり中聖牛の小型版として開発されたとみられ、これにより三角錐形牛類の種類が増えたことになる。一方、合掌木4本を頂部でまとめて四角錐形を造るのは菱牛のみで、このタイプの大型版が必要とされ大菱牛が開発されたと考えられる。大菱牛と大川倉の登場は、近世末期においても河川に適合した牛類の開発や導入が進められたことを物語っている。

大菱牛と大川倉は、いつ、どこで開発され、どの地域に普及していったのか、さらに詳しく解明されていくことを期待したい。

註

- (1) 土木寮蔵版『堤防橋梁積方大概』明治4年(国立国会図書館デジタルコレクション)。
- (2) 甲州川々川除道具建一組当内訳帳、山梨県立博物館蔵、甲州文庫、歴-2005-003-019095。

- (3) 甲州川々川除道具建組当内訳帳、同、太田家文書、歴-2005-019-003093。
- (4) 内訳帳の位置づけについては、畑2020参照。
- (5) 小野武夫編纂『近世地方経済史料』第2巻、近世地方経済史料刊行会、1932年。
- (6) 尺木牛については、別稿を準備している。
- (7) 弘化2年巳春定式川除御普請出来形帳、山梨県立博物館蔵、篠原家文書、歴-2005-029-002174。
- (8) 弘化4年未春定式川除御普請出来形帳、同、歴-2005-029-002172。
- (9) 嘉永6年当丑川除御普請出来形帳、同、歴-2005-029-002065。
- (10) 嘉永7年当寅春定式御普請出来形帳、同、歴-2005-029-002064。
- (11) 安政5年当午春川除定式御普請出来形帳、同、歴-2005-029-002060。
- (12) 東南胡村当申秋急水留御普請出来形帳、山梨県立博物館蔵、甲州文庫、歴-2005-003-019029。
- (13) 天龍川通七蔵新田池田村立会場当西夏急破御普請出来形帳『豊田町誌』資料集、近世編(Ⅲ)、95、豊田町、1994年。
- (14) (最勝寺村)御普請諸色直段書上帳『増穂町誌』史料編、55、増穂町誌刊行委員会、1977年。
- (15) 富士川通松岡村模様替堤御普請出来形帳、吉村久夫「塩坂家文書」『仮題 富士川治水に関する古記録の集成』1917年。

引用・参考文献

- 安達満 1978「釜無川治水の発展過程(二)」『甲斐路』第32号 山梨郷土研究会
- 大石慎三郎校訂 1989『地方凡例録』下巻 近藤出版社
- 大谷貞夫 1996「第2章 江戸幕府の治水職制」「第3章 江戸幕府の治水仕法(第3節 国役普請)」『江戸幕府治水政策史の研究』雄山閣出版
- 建設省北陸地方建設局阿賀野川工事事務所 1988『阿賀野川史』
- 眞田秀吉 1932『日本水制工論』岩波書店
- 千賀裕太郎解題 1992『土木工要録』農業土木古典選集 第Ⅱ期1巻 日本経済評論社
- 知野泰明 1997「(治河要録)解題」『川除仕様帳・積方見合帳・治河要録・通潤橋仕法書』日本農書全集65 農山漁村文化協会
- 畑大介 2005「甲斐の国中地域における近世治水用牛柵類の展開」『中近世 甲斐の社会と文化』岩田書院(のち畑大介 2018『治水技術の歴史 一中世と近世の遺跡と文書一』高志書院に収録)
- 畑大介 2019「菱牛の仕様について」『山梨県考古学論集』Ⅷ 山梨県考古学協会
- 畑大介 2020「川除普請定法書と牛柵類の仕様 一甲州の富士川水系を中心に一」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集

研究
ノート

早川流域で発見された湯之奥型金挽臼

小松美鈴

はじめに

『早川町誌』⁽¹⁾や、中央大学山村研究会による『山村史料の調査と成果』⁽²⁾は、早川町内の金山について詳細にまとめており、早川流域の諸金山の研究に不可欠なバイブル的存在である。最近では、近代に稼業され資料や写真が残っている茂倉鉦山や都川金山について、早川町を拠点とするNPO法人・日本上流文化圏研究所が独自調査し、その内容は所報『やまだらけ』⁽³⁾に読み物的に掲載されている。その後、早川町内の鉦山について目立った報告や研究はないが、近年、文献史学の視点から早川の日影沢に注目した興味深い研究も発表されている。⁽⁴⁾

さて、『早川町誌』には22か所の金山が記録されているが、いずれの現地も極めて山深く、熊の出没も頻繁であるため、安易に足を踏み込むことは危険であり、また金山の詳細を知っている者も今となっては皆無と言える。老平集落の奥に位置する老平金山は、比較的容易に現地に行くことが可能で、主沢筋に幾つかの坑口が開口している。筆者が属す湯之奥金山博物館では見学会も開催しているが、これらの坑道以外の遺構は確認していない。老平に限らず、多数の金山の存在が確認されながらも、同町内の金山由来である鉦山臼の確認報告は、実は現時点までほとんどない。

かつて、保金山下流の保川で作業従事していた庭石業者が偶然発見し、鉦山臼と認識したため採取し遺失を免れた定形型金挽臼を当館にて保管収蔵しているが、現状、早川入り諸金山由来唯一の金挽臼といえる。

こうした状況の中、このほど当館関係者が鉦物資料の探査中、早川河川敷で新たに湯之奥型の金挽臼を発見した。

発見者は一般の当館関係者であり、本人から資料全般について当館に委ねられたため、漂流物ではなく早川諸金山の歴史を証する文化財として扱い、所有権を確定したい意向から関係各所へ報告した。所管の警察署へ届け出し半年の観察期間が経過した後、文化財資料として当館にて保管の運びとなった。

アウトドアレジャーとして鉦物採集の趣味が浸透している昨今、一般人が川遊び中に偶然に鉦山臼などの遺物を発見する可能性は決してレアケースではなく、発見時手続きのフローチャートとしても明文化しておくことは、今後のためにも十分に意味があろう。同時に早川諸

金山の貴重な一資料について、発見の経緯を示し、先学論考を踏まえたうえで、二の点について考察する。

発見経緯及び資料情報

早川町内の金山位置図を確認すべく、金山研究関係者が最も見慣れている地図を図1に、詳細な発見地を図2に示す。

発見された上臼は湯之奥型金挽臼で、長年、河川での水没と転石の影響から全体的に摩滅摩耗が激しく、角張った個所は皆無で全体的に丸みを帯びた不整円形である。摩耗のため回転痕は残っておらず、かろうじて、ものくぼり溝と判断できるやや直線的な溝が一本、側面に

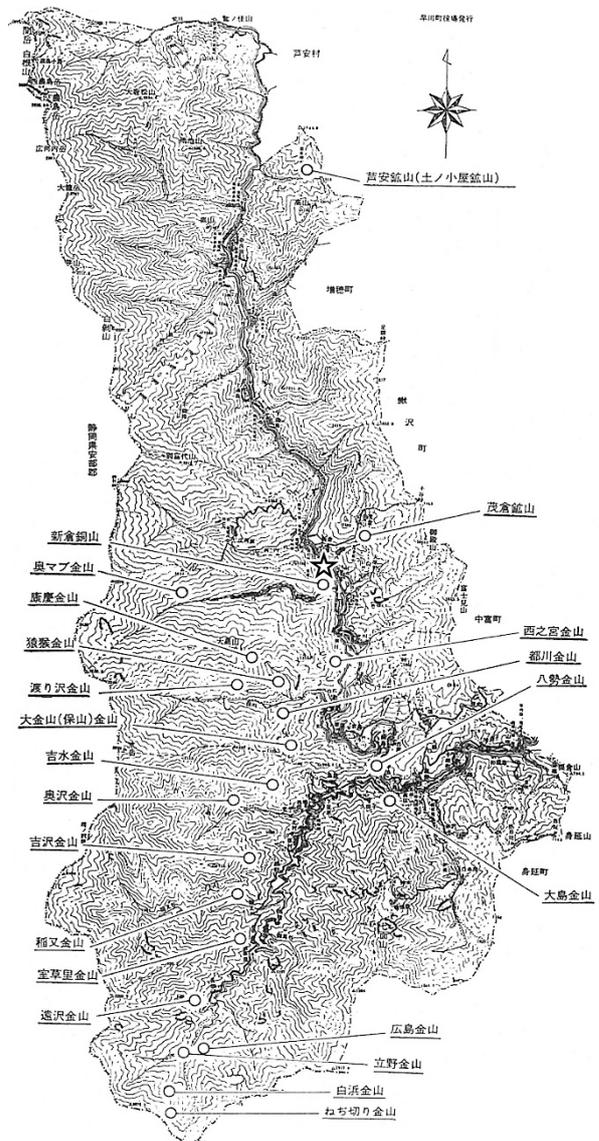


図1 早川町の金山分布図(『早川町誌』より)
※湯之奥型金挽臼の発見地点を地図中☆印で追記

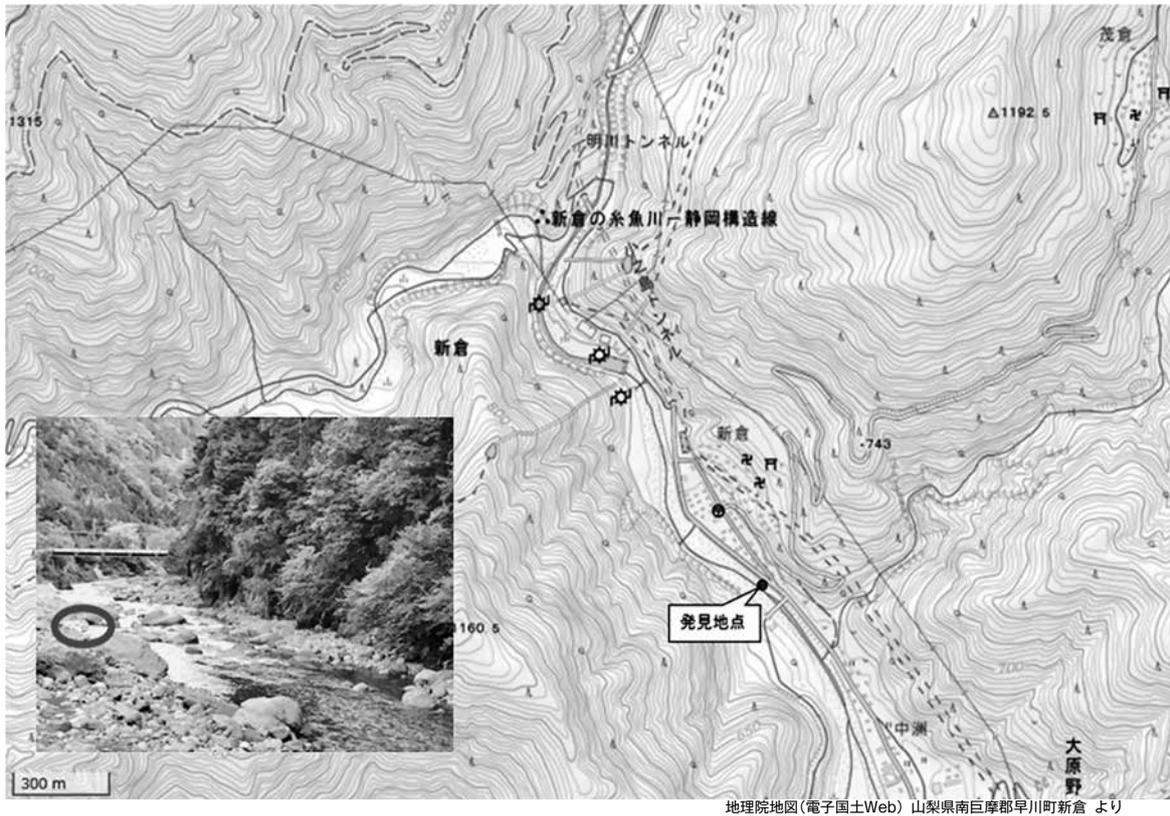
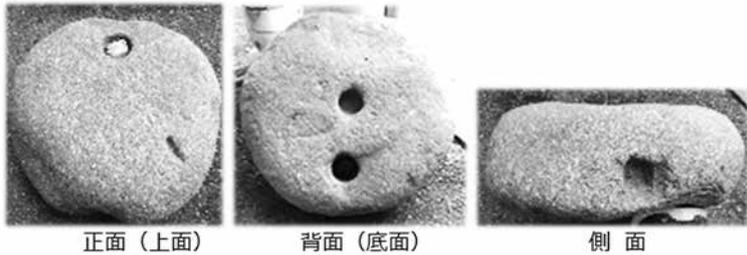


図2 湯之奥型金挽臼 発見地点 早川町新倉



遺物名	金挽臼(湯之奥型上臼)	
発見地	早川町新倉地内番370付近	
材質	閃緑岩	
法量他	直径	33cm
	厚さ	13cm
	重量	30kg
その他	柄穴一か所(方形)	

図3 河川で発見された湯之奥型金挽臼と資料概要

一か所、方形の柄穴が確認できる。供給孔や軸孔、柄穴の穿ち具合から、比較的丁寧に成形されていたと推察できる。発見時、供給孔には石英質の石が嵌っていたが長年の漂流による二次的な物である。

金挽臼が発見された早川町新倉付近は、古くより河川氾濫が多いことが『早川町誌』にも触れられており、図1のように早川に沿った山中に数多の金山遺跡が存在するが、長年の風雨などの自然作用によりいずれかの遺跡から落石したものであろう。問題はどこから流れ着いたかであるが、現時点では黒桂金山と考えている。

発見地の最近距離に位置する鉾山跡は新倉鉾山や茂倉鉾山だが、いずれも金銀銅を産出した記録はあるものの、基本的には銅山であり、また稼業時期が昭和初期～中期であるため金挽臼を使用する条件にいずれも当てはまらない。すると「奥マブ金山」、つまり早川入り諸金山の代表格である黒桂金山由来のものが、長い時間をかけて

流れ着いたと考えるのが最も妥当である。同時に、黒桂金山で湯之奥型金挽臼が使用されていた可能性を示唆するものである。

湯之奥型金挽臼は軸孔と供給孔を別々に有し、金挽臼分類において供給孔と軸孔が共用される黒川型と、山金山開発時期に誕生した鉾山臼として同列で語られる。その後、近世初期頃から回転機構に輪カネを使用した定形型の金挽臼へと転換し、近世以降を中心に開発された金山で全国的に使用された⁽⁵⁾。そのため各地の金山での確認情報も比較的多い。

鉾山臼研究の進展に伴って、黒川型金挽臼が多数現存すると伝えられてきた金山遺跡の現地調査を改めて進めているが、それは鉾山臼が一括資料的に現地に残されている金山が、より強固な検証材料になりうるからである⁽⁶⁾。

一方、多数の黒川型金挽臼が残る金山遺跡が全国で確

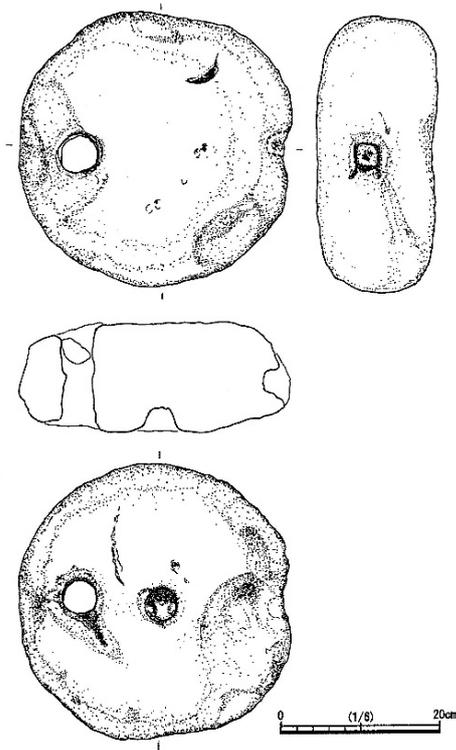


図4 早川新倉採集の湯之奥型金挽臼実測図

認められる中、湯之奥型金挽臼が多数確認できる金山遺跡は、現時点では湯之奥中山・内山・茅小屋の3金山以外には存在しない。同山中で同系列の中山・内山・茅小屋の3金山の湯之奥型金挽臼には、外形サイズをはじめ整形の仕方に3金山それぞれの特徴がある⁽⁷⁾。加えて、遣り木方式は柄溝であり柄穴ではないということもまた3金山共通の大きな特徴である。

湯之奥金山以外の湯之奥型について、十島(南部町)、土肥、佐渡、東京小菅銭座で各1点ずつの報告があるが、それらを見る限りでは湯之奥金山との技術交流や型式伝播は微塵も感じさせない。つまり現時点では、湯之奥型金挽臼が盛んに使用されていたと断言できる金山は湯之奥金山のみであり、故に黒川型金挽臼と対照的に極めて局地的な使用範囲であると言える。

おわりに

新倉の湯之奥型金挽臼に話を戻しつつ、かつて保川で発見された定形型金挽臼と考え合わせまとめたい。1点だけの資料では、金山村の姿、開発規模や鉦山臼の背後に見えてくる詳細な時代考察までに及ばないと言いつつも、早川入り諸金山遺跡の鉦山臼情報がゼロから1、1から2になったことは、検証の大進歩につながる。

保の定形型金挽臼の存在について、一般に近世には全国的に古い金山跡に再開発の手が入ったことが記録に残っていることから、文献史料と照らし合わせても一切の矛盾はないが、これだけでは、保金山は近世まで稼

業したと言えるのみである。しかし、今回の発見を根拠に、仮に黒桂で湯之奥型金挽臼が主として使用されていたとするならば、近在の保でも、古くは湯之奥型金挽臼が使用されていた可能性が考えられる。ただし遣り木方式は「柄溝」ではなく「柄穴」であり、湯之奥金山の湯之奥型金挽臼の最大の特徴でもある柄溝ではない。ということは黒桂の職人が早川の地に合わせた独自のテイストをもった湯之奥型金挽臼を製作していたことも考えられる。

いずれにしても、この“早川の湯之奥型金挽臼”を足掛かりに、早川入り諸金山周辺で湯之奥型金挽臼が複数確認されれば、それは山梨県南部の甲斐金山遺跡群において湯之奥型金挽臼が使用されたという可能性を示すことに他ならない。多少強引な拡大解釈のきらいもあり、多くの課題は依然残るが、この発見は今後の鉦山臼研究にそれほど大きな意味と重要性を投げかけるものと考えている。
(甲斐黄金村・湯之奥金山博物館)

註

- (1) 早川町『早川町誌』早川町教育委員会 1975
- (2) 中央大学山村研究会『中央大学山村研究会古文書調査報告書Ⅰ 山村史料の調査と成果—山梨県南巨摩郡早川町葉袋・樽坪・千須和—』2003
- (3) 「戦国期の早川入りの金山」『やまだらけ』No.15 2006 ほか
- (4) 数野雅彦「甲斐国初期金山開発の様相—15世紀後半～16世紀前半を中心に—」『武田氏研究』第57号 2017
- (5) 花石公夫「金挽臼の形態的変遷 特に定形型金挽臼についての一私見」『岩手史学研究』第99号 2018
- (6) 拙稿「福井県大野諸金山の遺構調査—鉦山臼と遺構の現況について—」資源素材学会春季大会 2021 発表資料
- (7) 萩原三雄「甲斐・湯之奥金山遺跡の研究結果と課題—操業年代・「金山衆」・鉦山臼をめぐって—」『武田氏研究』第63号 2021
- (8) 山梨県『山梨県史 資料編8 近世1 領主』694号 622頁 1997

参考文献

- 萩原三雄編『日本の金銀山遺跡』高志書院 2013
井澤英二「日本における山金採鉦の始まりと回転臼の使用」資源素材学会春季大会 2019 発表資料

編集後記

1987年に所報第1号を刊行し、この度60号を迎えました。今回は所員らによる研究ノートに掲載しました。

(T.H)